



情 緒

松本孝次郎

幼児の教育で尤も大切なのは情緒の教育であります。今このことを話す前に、一般に人間の感情教育といふものが余程大切なものであるといふことをお話しいたします。

人の感情教育は普通にいふ人物といふことに大關係があります、世間の人が彼の人は意地が悪いとか、大層偏屈だとか、氣の沈んだ人で相手になつて居ても面白くない人だとかいふのは皆其人々の持つて居る感情の發達如何といふことにあるの

であります。故に感情がよく發達して居らんと其人の幸福が少ないものである。何故なれば斯様な人は人にいやがられる。又人の仲間入をすることが出来ぬ、つまり一生不幸に暮さなければならぬ即ち其人自身に取つては斯様であるが、又これを他人の側から考へて見ると其仲間を失ふことであるから矢張不幸である。要するに感情のよく發達して居ないのは自分のため、他人のために損である、而して斯程に大切な感情を教育するのは如何なる時代であるかといふに、これは重に家庭の時代である、即ち感情教育は家庭の任務である。故に學校に於ては家庭時代に於て形づくられた感情をうまく處置するのである、凡て感情教育は智育より先に行はれるものである。高尚な感情は智識が發達して後でなければ起らぬものであるが、劣

等な感情は智識より先に進歩するものである。即ち情緒の如き低い感情は家庭に於て、親に由て形づくられるものである。又幼稚園に於て保姆に由て形づくられるものである。處が此の感情教育は實際甚だ困難である。何となれば幼兒を育てる人が先づ自身で立派な感情を持つて居らぬと幼兒の感情を立派に發達させることは出来ないのである。例へば鐵を磁石にこすると、磁氣が鐵にうつて行く現象があります。感情教育もこれと同じで親なり保姆なり、持つて居る感情が幼兒にうつるのである。

故に親や保姆が荒い感情を持つて居れば、幼兒も自然に感情が荒くなり、之と反對に穩かな感情を持つて居れば、幼兒の感情も穩かになるものである。

斯様に親なり、保姆なりの感情は幼兒に對して大切なものであるが、實際左様に立派な感情を持つて居る人といふものは得難いのである。人は教育の力で幾分か感情を直して行くことが出来るものであるが、性來の性質は中々直すことが出来ぬもので性來氣短の人もあり、内氣な人もあり、氣輕の人もあつて、此等は皆知らずくの間幼児に影響して居る。實に感情の教育は六ヶ敷ものである。而して今日普通如何なる法をして、感情教育をして居るかといふに智識をもつてして居る。即ち親、保姆は其情を呈はして直接に教へるのではなくて、親に對してはどうあるべきものである長上に對してはどうあるべきであるといふ様に智識を授づけるのである。そして其結果各々自分で其情を起す様にして居る。偶々偶發事項のあつた

時には親なり保母なりは、それに對する情を起して、直接に感情教育をすることが出来るが、これは極々少い場合であつて普通は智識を授けるといふ間接の方法である。處が理屈は分つても、實際其情は起り難いものであるから間接の教育法は甚だ効力が少ない、しかし吾々はこれに優るよい方法を見出すことが困難なので効力の少ない間接の方法を以てでも大切の感情教育をせねばならぬのである。

情緒といふのは通例いふ喜怒哀樂の情である。或は恐怖、廉恥、愛情、同情、自尊 Pride 嫉妬、等である。斯様な情は極高尚な智識に關係して居るものでない。しかし斯様な情の起る時は智的作用が起つて快、不快を感じるのである。即ち快不快が一種の形を取つて表はれた場合が情である。

情緒の一層高尚なものは情操であるが、これは眞善美の高尚な標準を見とめて其標準に訴へて快不快を感じるのである。故に此の情操は高尚な智識を得た後に起るものであるが情操は家庭又は幼稚園で教育すべきものである。而して實際にあたる中々六ヶ敷ことが多い、例へば幼児が始終いたづらをする。初めの間は優さしく叱責して置く。處が度重なるに従つて、少しの叱責では効力が無い様になつて遂に罵詈嘲弄する様なことか起る。而してこれは、たとひ言語には呈はさずども幾分か舉動に呈はれて来る。こうなるゝ其親や保母の心持では幼児を直す積でも幼児は決して少しも直らぬ。何となれば度々叱責せられる事によつて、又罵詈せられる事によつて、幼児の持つて居る廉恥といふ情緒が亡びてしまふからである、幼児を

叱責した時にこどもは一寸赤い顔をする。これは丁度適當な度である。しかし、度々顔を赤めさせたり。又ひどくすると段々と赤めることが少なくなつて、遂には赤めなくなる、故に幼児を叱責する時は其廉恥の情を亡ぼさぬ様に適度にしなければならぬ。又他の例でいへば幼児が泣く時に只之を可愛相にといつて慰めてよいか、又其の様なことで泣くものでないと言ふがよいかといふと、これは發達の程度による、即ち幼児自身が自分で我慢することか出来る様に意志が發達して來た時には我慢させる方がよいか、またそれ迄に達せぬ時は可愛相にといふて慰めてやるかよい、そして其時に泣くのをやめなと、言はないで、黙つて、はつて置くがよい。そうすると泣くといふことによつて次第に苦痛が滅して來て、遂には泣き止むも

のである。斯様な時に泣くなといはれると幼児は之を我慢する丈の意志が發達して居らぬからために非常に苦痛を感じるのである。しかし、意志が發達して來てからは十分我慢させるからよろしい。かゝるときに、同情を起してさう痛いてわらうなと言ふと一層泣き出すものである。又普通よく行つて居る事であるが、幼児が柱に頭を打ちつけて泣くときなどに、殆ど柱に罪があるかの様に幼児をして柱を打たせ、大人も、また幼児をたすけて、これを打つことがある、これは柱を打つといふことのために幼児の注意がそれに轉じて痛を減するといふことはあるか、これを情の教育の方から考へると、自分の痛を減するために罪のないものを打つといふことは幼児の將來のため、よろしくないことである、故に斯様な場合には大人が幼

兒の痛む所をさすつてやると共に幼児をして柱をさすらせるのがよろしい、そうすれば幼児は大に同情を養はれるのである。其他感情教育に關する斯くの如き例は度々起り易いものである。(つゞく)

### 奇妙な動植物 (つゞき)

田寺寬二

#### (四)(五)(六)(七)の結論

長々といろくの奇妙な鳥類について話しましたが、皆さんも己に於讀みになつて御承知の通りどの鳥でも皆雄ばかりが美しくつて、而もよい聲を發し、雌はまことに御粗末で啞が多いです何んと不思議な現象ではありませんか。

此が所謂雌雄淘汰と申すもので、つまり動物界では雌の數よりも雄の數が多いものですから、其

生殖の目的を達する爲めには勢ひ數の上からして雄は雌の歡心を買ふて其愛を得んければなりません。雌の歡心を買ふのには、自然其容貌色彩を美麗にして雌の注目する様にせねばなりません。乃で雄は或は美しい羽をつけ、或は異様な冠を着、或は美しくい聲を發する様に勉めるのであります。然し今鳥が其雌の歡心を得ん爲め白くなりたいたと思つた處で、早速あの黒い羽が白くなる譯のものでもなく、幾らもがいても鳥の頭にカサドリの様な冠を直々着るといふことは出来ませぬ。

然らば孔雀の羽極樂鳥の尾の様なもの、何うして得たのかと申しますと、決して一朝一夕に得たものではありませぬ。ずつと昔の祖先が其生存上必要にせまられて、その羽色を變へるとか、いろいろな聲を發して、雌の注意をひく様にとつとめ